

書下しエッセイ

● 井上靖

● 井伏鱒二

● 池波正太郎

● 石川達三

● 五木寛之

● 色川武大

● 遠藤周作

● 長部日出雄

● 大江健三郎

● 北杜夫

● 黒岩重吾

● 庄司薫

● 城山三郎

● 杉本苑子

読書社

● 田辺聖子

● 陳舜臣

● 永井路子

● 新田次郎

● 野坂昭如

● 野呂邦暢

● 畑山博

● 半村良

● 丸谷才一

● 丸山健二

● 三好京三

● 安岡章太郎

● 山口瞳

● 吉行淳之介

● 渡辺淳一

217 -3

読 書 と 私

定価 300円

1980年 5 月25日 第1刷

1980年 6 月10日 第2刷

著 者 井上靖ほか28名

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

庫

読 書 と 私

—書下しエッセイ集—



文 藝 春 秋

目次

井上靖	三冊の本	9
井伏鱒二	博多の旦那	17
池波正太郎	乱読の歳月	26
石川達三	賀川豊彦「死線を越えて」	32
五木寛之	偏見と散漫	39
色川武大	他者とのキャッチボールを	45
遠藤周作	他人になれる悦び	54

長部日出雄	観客席と現実のあいだ	62
大江健三郎	作家の読書	71
北杜夫	少年時代の読書	80
黒岩重吾	生と密着した読書	89
庄司薫	『椿姫』以来	98
城山三郎	『怒りの葡萄』	109
杉本苑子	子供のころの読書体験	118
田辺聖子	小説馬鹿の読書遍歴	128
陳舜臣	本とのさまざまな出会い	137
永井路子	後遺症	146
新田次郎	乱読修業	155

野坂昭如

妄想併用読書

164

野呂邦暢

私のシェヘラザードたち

170

畑山 博

作中人物に恋したころ

179

半村 良

たちのぼる湯気の中で

188

丸谷才一

書評の話

198

丸山健二

読書不用論

205

三好京三

丹羽文雄「小説作法（全）」

214

安岡章太郎

戦争と読書

224

山口 瞳

活字中毒者の一日

233

吉行淳之介

幾つかの「一冊の本」

242

渡辺淳一

読書について、断片的に

253

ここに収録したエッセイは、この本のために新たに書下されたものである。

読
書
と
私

三冊の本

井上 靖

終戦前に持っていた書物で、現在もお書架に並べている書物はごく僅かしかない。終戦前後の混乱期に、書物という書物は殆ど全部手ばなしてしまったので、現在手許にあるのは、その時手ばなすことが躊躇された書物ばかりである。その僅かな書物の中に、岸田劉生著「初期肉筆浮世絵」、松岡譲著「敦煌物語」、石田幹之助著「長安の春」といった本がある。

劉生の「初期肉筆浮世絵」は大正十五年、岩波書店の出版である。新聞記者時代、大阪の古本屋で購入したものであるが、私はこの本からは大切なものを教わっている。劉生は初期肉筆浮世絵の世界が持っている不思議な魅力を「でろりとした美しさ」という言葉で捉えている。江戸時代の風俗画や版画には、生き生きと庶民階級の女たちや遊女たちが取り扱われているが、その中でも初期肉筆浮世絵の世界は独特の魅力を持っている。たとえば「彦根屏風」などに見る女たちは多分に人々を人と思わぬ、既成道徳を無視して堂々と肩で風を切っているようなところがある。反良俗的で、不貞腐ったような容貌と風姿を持っているが、やはり一種の魅力と言えるものが感

じられる。

その魅力を適確に言い現わすことになる、たいへん難しい。それを劉生は「でろりとした美しさ」という言葉で捉えている。みごとに対象の持っている生命をわし掴みにした、そのものずばりの表現である。

もし「でろりとした美しさ」という言葉を使わないで、初期肉筆浮世絵の世界の魅力を解説するととなると、たくさん言葉が必要である。しかし、たくさん言葉を使ったからと言って、対象の持っている生命や美しさに迫り得るとは言えない。劉生に「でろりとした美しさ」という言葉を使われてしまったということは、たいへん困ることである。単刀直入、対象の持つ生命に迫り、うむを言わずわし掴みにしてしまっているのである。おそらくものを観るといことは、こういうことであるに違いないのである。

私は詩人としても、小説家としても、劉生の「初期肉筆浮世絵」に大きい恩恵を蒙っている。詩や小説を書く上ばかりではない。絵の前に立ったり、彫刻の前に立ったりする場合でも、自分の眼で、自分の心で観ようと思う。できても、できなくても、そうしようと思うのである。もし私に多少でもそういうところがあるとすれば、それは「初期肉筆浮世絵」とおして、劉生に学んだものである。

松岡譲の「敦煌物語」は、昭和十八年八月、日下部書店の発行である。昭和に入ってから大陸関係の書物は、時局柄たくさん出ているが、この一冊はそうした書物とは多少趣を異にしている。

著者は「あとがき」で、身は従軍作家ならずとも、銃後に於いて分に応じ文化活動をなし、識者の関心を殆んど閑却されたる方面に向けるのも亦肝要であろうかと考へ、……言ひ得べくんばこれは私の事変小説なのである、と、このようなことを記しているが、これは時局に合せての挨拶であつて、内容はこのようなものではない。少なくとも、この書物が出版された昭和十八年後半という時点に於ては、著者の「あとがき」に於ての発言は苦しい。むしろこのような書物はやがて出版できなくなるので、出せる時に出しておこう、そういう気持ちで働いていたに違ひないのである。著者ばかりでなく、このような書物を出す氣になつた出版社もまた天晴れだと言ひたい。

特に取りたてて、このようなことを記したのは、読者である私のこの書物に対する愛着も、没入の仕方、時局とは全く無関係なところで成立しており、こうした贅沢なものがいっぱい詰まつている世界に遊び、うつつをぬかすのも、まあ、この「敦煌物語」あたりが最後になるだろう、そういう思いが心のどこかにあつたからである。それだけに「敦煌物語」の魅力は大きかつた。いつ再度の応召があるかも知れないと思ひ思ひしている時期、時局とは全く無縁なひどく贅沢なもの、すばらしいものが、はるか遠くの方に置かれてゐるふしぎな世界に遊ばせて貰つてゐる思ひは格別だつた。

「敦煌物語」は著者に言わせると、文化史小説ということになる。しかし、小説的作爲は殆ど爲されてゐない。聞き手と語り手が登場し、語り手が西域に関する蘊蓄を傾けながら、スタイル、ペリオ、大谷探検隊などの敦煌資料入手の経緯を語つてゆく仕組みになっている。言うまでもな

く著者の敦煌や、ひろく西域に関する異常なほどの関心と、その情熱、更にそれを支えている永年に亘って貯えられた知識がもたなくなって、それを一人の老人に語らせているのである。この作品の中の語り手は、言うまでもなく著者松岡譲自身に他ならぬ。

この作品から窺われる著者の敦煌、西域への関心と、その情熱と、知識はたいへんなものであり、そこに視点を当てると、やはり読み出したらやめられない面白さがある。著者は敦煌、西域に関する内外のあらゆる書物を渉猟しており、単なる好奇心、趣味というような域を超えて、立派な敦煌研究家、西域研究家たり得ている。巻末の「文献略記」に紹介されているたくさんの方の書物は、著者の書齋に蔵せられていたものであろうし、同じく巻末の「西域重要地名国名要釈」は、おそらく著者のノートに記されていたものであろう。

「敦煌物語」が出た頃、私自身も亦、敦煌関係、西域関係の書物を漁って読んでいた。明治末から大正、昭和にかけて、日本には優れた敦煌学者、西域学者が輩出しており、発表される論文には一種独特の熱っぽい魅力が湛えられていた。私はいつとはなしに、そうしたものの擒とりこになってしまつて、片っぱしからそうした書物を読んでいたのである。

そういった時期であつたればこそ、松岡譲の「敦煌物語」を読んだ時、自分も亦いつかこういうものを書くことができたかと、そういう思いに捉えられたことを記憶している。

「敦煌物語」の著者も、たくさんの方の優れた敦煌学者、西域学者たちも、もちろん敦煌にも、西域にも足を踏み入れていない。学者たちにとっては、敦煌も西域も、足を踏み入れることのできる場所ではなかった。一生行くことのできない聖地であつた。一生行くことはできない、そういう

覚悟の上に立つての研究であつたればこそ、一種言い難い熱っぽい魅力が、その難しい論文の中に醸成されたのであろう。

おそらく「敦煌物語」の著者にとつても、敦煌は足を踏み入れることのできない聖地であり、それなればこそ、驚くべき情熱を以てひろく西域関係の歴史を調べ、内外の専門家の研究書や論文の林の中に分け入り、そしてそれに具体的イメージを与えるために、スタイン、ペリオ、ヘディンらはもちろん、可能な限りの東西の西域紀行の類を座右に置いたことであらう。

「敦煌物語」を読んでから十数年経って、私は「敦煌」という小説を書いている。十数年経っていたので、時代はすっかり変っていたが、やはり敦煌というところは、依然として足を踏み入れることのできぬ聖地であつた。そうであればこそ、小説を書くことができたのかも知れない。

小説「敦煌」を書いて、二十年経過した時、足を踏み入れることのできぬ聖地が、ふいに向うから近寄つて来た。三年前（一九七七年）招かれて曾ての西域、新疆ウイグル自治区を訪れることができ、更に昨年（一九七九年）も再度、同じ地区を訪ねている。敦煌の方も、これまた一昨年（一九七八年）、自分の足で、千仏洞の前に立つことができた。

西域、敦煌の旅から帰つて、改めて「敦煌物語」を読んだが、なんの違和感もなく、それ許りか、改めて教えられることが多かった。

それはともかく、これから実際に敦煌に足を踏み入れる人たちは多くなつてゆくだろうと思う。もうこれからあとは、第二の「敦煌物語」は生れて来ないに違いない。敦煌も、西域も、あのふしぎな夢と情熱を支えた、足を踏み入れることのできぬ聖地ではなくなったからである。

そう思うと、「敦煌物語」は貴重な述作であるとしなければならぬ。敦煌への夢と、歴史的思慕とでも言いたいものを綴った書物は、松岡譲の「敦煌物語」を以て終ってしまったのである。

石田幹之助博士の「長安の春」は、昭和十六年四月、創元社発行。出版された時、購入したものではないかと思うが、それから三十余年、この書物は私と共に幾つかの書齋を転々として、今日に到っている。「長安の春」と私の関係は、永年に互って愛蔵しているといったそのようなものではなく、もっと直接的である。

私は「天平の甍」、「楊貴妃伝」、その他何篇かの小説で、唐時代の長安を取り扱っているが、いつも「長安の春」の恩恵を蒙ること大なるものがある。私にとって、この本は辞書であり、参考書であり、そしてそれ以上に、長安を書く場合に座右からはなすことのできない護符のようなものである。同じ著者が戦後要書房から出した「唐史叢鈔」もまた、私にとっては同じような役割を果たしてくれている。

「長安の春」には、題名となっている「長安の春」を初めとして、「胡旋舞」小考、「当壚の胡姬」、「長安盛夏小景」など七篇の研究随想が収められている。いずれも石田博士の該博な知識によって織りなされたものばかりで、「長安の春」一巻の、他に類を見ない重厚にして軽妙、独自の魅力が形成されている。

言うまでもないことであるが、当時の国際的な大都市・唐都長安は、現在はその大部分が地下に埋っており、現在の西安の町は、往古の長安の町の東北隅の一画に過ぎない。現在の西安の町

を横に二倍半の広さに拡げ、南の方にそれを三つ並べる。すると往古の長安の町の結構がうかがえる。そしてそれをぐるりと城壁で囲み、城外にも繁華地区を置かねばならない。

このような唐都長安の姿を具体的に偲ぶには文学的資料に依る他ない。日本の奈良の都合とは異って、長安の方には文学的資料はたくさんある。唐時代の詩人の詩集をひもといても、街の賑わい、郊外の行楽の模様から、祭礼の日の混雑、酒場の雰囲気、牡丹の名所まで、何から何まで、まるで風俗事典のように収められている。それからまた漢から五代に到るまでの伝説、奇聞を収めた「太平広記」といった説話集もある。資料には事欠かない。

だが、しかし、「全唐詩」四万八千首や、「太平広記」五百巻の文字の密林の中に入ってゆくことは、専門家でない私たちには到底望めないことである。石田博士は私たちに替って、それをやって下さっており、私たちに理解できる書き方で、それを示して下さっている。それが「長安の春」であり、「唐史叢鈔」なのである。

殊に本書の題名になっている随想「長安の春」はみごとに春の長安の再現である。唐都長安に関心を持つものが、誰でも一度は必ず眼を通さなければならぬ名随筆である。生き生きと、千二百年前の盛唐の都の春のたたずまいが描かれている。氏ほどすばらしい長安の案内者はない。私たちは氏によって導かれて行く。氏が立ち停まるところで、私たちも足をとめる。氏が歩き出すと、私たちも氏のあとに随って歩き出す。氏が春明門のあたりで長く立ち停まったので、私たちもそこに長く立ち停まる。そして春明門附近の春がいかなるものかを知り、国際都市としての長安の賑わいに今更のように眼を見張らされる。